

## 研究資料

## 脱活乾漆造 菩薩立像

津田 徹 英

ここに紹介する菩薩立像(図1~4)は、これまでその存在が知られることがなかった脱活乾漆造の作例である。内閣総理大臣を三期(一九六〇年七月一九日~一九六四年一月九日)にわたりつとめられた池田勇人(一八九九~一九六五)氏が、昭和四〇年頃にお茶の水の古美術商・萩原安之助氏より入手された由であり、その後、現所有者の家蔵となり今日に至っている。尊名を特定する標幟等の特徴を欠くため、本稿の標題では菩薩立像と表記した(以下、本像と呼ぶ)。

像高七七・一cm。<sup>(2)</sup>後述の通り裾まわり以下を後補とするため、当初の像高は不明である。頭体のバランスを考えるならば、当初の像高も現状とさほど変わらなかったように思われる。

像は頭頂において髪を五束にまとめ、地髪部との境と上方の二箇所を紐二条の元結をもつて括り、上方の元結より先の髪を後方から内に向けて巻き込んでいる。巻き込み部は側面で渦巻き状となる螺髻とする(図3、挿図4・5)。地髪部は髪束等をあらわさない。頭上には紐二条の上に列弁を巡らす天冠台を戴く。ただし、現状のそれは両耳上付近に当初のものが残存する程度で、大半はそこかたちに倣って補作されたものである。天冠台下の髪は正面で髪を十二束に振り分けるとともに、髪を両耳前に垂らす。後頭部は髪束等をあらわさないが、左耳うしろの僅かに立ち上がる髪際の整形のみが当初で、残りはすべて後補である。

額はあまり広くあらわさず弧を描く両眉が迫る。白毫の痕跡はない。当初から白毫はなかったものと思われる。顎下に括り線をあらわし、三道相とする。耳朶は貫かない。

条帛・裙・天衣を各々着ける。このうち、条帛は左肩から右脇腹に懸け、左胸下

で一端を斜めにわたる条帛の上端から内側に折り込んで、その下層を通り、そのまま垂下してあらわれ、腹部に及ぶ(図1)。背面においては条帛のもう一端をあらわさない(挿図2)。

裙は正面で打ち合わせ(右衽とするか)。この打ち合わせ部は両脛の間で数段の折り返しをつくる。さらに、両体側の前後(四方)においてたくし上げ、裙の上端を折り返して両大腿部前と臀部に舌状に懸かる。

天衣は浅く上端を折り返したものを背後から両肩に懸けて覆い、その際、腋上で左右ともにたくし上げる。正面では上膊に懸かるところでたくし上げをつくりつつ、肘内に垂下し、右方分は膝前(大腿の半ば)でU字状に弛んで屈臂した左手前膊半ばの内側から外側に懸け(垂下部は欠失)、左方分は両膝頭付近においてU字状に弛んで垂下した右手前膊半ばの内側から外側に懸ける(垂下部は欠失)。

装身具として胸飾と腕釧を着ける。胸飾は現状剥落が甚だしく概形を留めるのみであるが、痕跡から紐一条の下端に列弁をめぐらせたものを基本帯とし、この基本帯に沿って下端に紐一条をあらわし、その中央三方に珠を配したようである(もしくは、連珠を紐一条で挟んだものを基本帯として、下端中央の三方に珠を配したか)。腕釧は紐二条に列弁を巡らす。ただし、現状の腕釧は左右ともに後補である。

顔をやや上に向けて正面を向き、腰を左に捻り、右脚を遊脚とする。右手を垂下して掌を左斜め前に向けてながら五指を軽く開く(現状、第五指先を欠失する)。左手は屈臂して脇腹付近で掌を正面に向けて、第一・三指を捻じ、四指を添え、第二・五指は指先を半ばより欠失するが、指勢から判断して軽く伸ばしていたようである。なお、現状の両手先(木製)は腕釧を含んで後補とみられる。

像は後述するX線透過画像から明らかなように脱活乾漆造の技法でつくられており、表面に木屎漆を盛り付けて整形を行い、肉身部と着衣に漆箔を施している。当初の造形を伝える箇所は造立時のものが残存するようである。なお、髪には彩色を施していたと考えられるが、色味の詳細については不明である。

現状、上述の天冠台のほか、額左から真下の脛・毗・頬下にかけて、右毗の周辺に補修があり、胸飾、腹前に懸かる条帛、腹部下の裙の折り返し部先端などでは表層の木屎漆が剝離・剝落して表面の荒れが目立つ。また、後頭部、背中に懸かる天

衣と条帛、両上膊の後方部、右腹前の天衣遊離部、左脇腹、臀部に懸かる裾折り返し部、右大腿側面、脚部裏（脹脛）等に後世の手が加わる。裾の裾まわり以下を後補とすることともども、伝世の過程が決して平坦でなかったことを示唆するであろう。

ただし、それらの損傷・補修は造像当初の像容を著しく損ねるまでには至っておらず、頭部に関して言うならば、丸く太い螺髻はほぼ当初の造形であり、面相についても、上述の通り左臉の周辺や右毗付近に若干の補修があり、鼻先から右小鼻にかけての欠失が認められるものの、天冠台下正面における髪束の膨らみや、鼻筋が通り、人中を短くして小づくりとする口許などは当初のかたちをそのまま伝えていゝる。側面観（図2-1a、挿図4）に窺うことのできる眼球の膨らみをともなつた臉、ふつくらとした曲面で構成される頬、小さな口許から丸みを帯びた顎、さらには、三道へと続くあたりの微妙な曲面であらわされた肉付きなども造像当初のかたちをよく留めている。それらの造形は、髪に毛筋をとまなうなどの点では異なるものの、丸く太い髻をもってあらわす点や、やや顎をしゃくりあげる点ともども、天平時代後期（八世紀後半）の法隆寺大宝藏殿安置の弥勒菩薩坐像（像高六二・四cm、木心乾漆造）からの展開を見て取ることも可能であろう。一方、丸く太い螺髻を結び、天冠台下の髪を十二束に振り分けるとともに、鬢髪を両耳前に僅かに垂らす形式は、同じく天平時代後期（八世紀後半）の唐招提寺菩薩像頭部（高七一・二cm、木心乾漆造）にも認められる形式である。総じて法隆寺像や唐招提寺菩薩頭部と比べると、本像はそれらの系譜に連なりながらも穏やかさを進めた感がある。むしろ、天平時代最末、もしくは、平安時代初期（八世紀末〜九世紀初め）の造像が考えられる奈良・法華寺伝梵天像頭部（高六五・三cm、木造）、及び、伝帝釈天像頭部（高八〇・〇cm、木造）に通じるものがある。耳朶を不貫とする本像の耳のかたちは他に類例をみないが、後掲のX線透過画像が示すように補修の痕跡は左耳朶先のみであり、上述の法華寺伝梵天像頭部のそれを参考にすれば、当初の造形をそのまま伝えるものと考えたい。

体部は、頭部以上に表面の補修箇所も多いが（既述）、当初の造形は、正面観では左胸、及び、これに懸かる条帛の上端、腹部下で舌状に懸かる裾の折り返し部に

残る衣文線や周縁の襞（挿図6）、膝頭付近でU字状に懸かる天衣の左半分、両脛部に懸かる裾にあらわれた大波と小波を交互に繰り返す衣文線（挿図7）に窺うことができ。背面（挿図2）の、右腋下からくびれて腹の膨らみに及ぶ肉身とこれに懸かる条帛部、垂下した右腕の上膊半ば以下も当初の造形を伝えるとみてよいであろう。このほか、両肩に懸かる天衣や、右体側から後方にまわり込むあたりの裾の衣褶も、薄く後世の漆塗膜が及んでいるため衣文線がやや鈍くなっているが、基本的に当初の造形を留めるようである。

そして、これらのことを踏まえつつ改めて像全体を眺めてみると、正面観（図2-1b）では頭部の大きさと相まって両胸・肩幅が広く、これに対して、下肢がやや細身となるが、側面観では（挿図3）、胸下から腹部に及ぶ肉身が二段にくびれるあたりは肉感をともなつており、また、大腿から臀部にかけて厚みがある。しかも、その当初の造形をよく残す左大腿側面にあらわれた縦襞を連ねる裾の表現は（図2-1a）、両脛部に懸かつて大波と小波を繰り返す裾の衣文表現ともども、降つて平安時代初期（九世紀前半）の滋賀・向源寺十一面観音像（像高一九五・〇cm）の側面観に通じて行くものを見て取ることができよう。

そして、これらの造形上の特徴は、本像が脱活乾漆造の作例ながらも天平時代の最末期に位置づけるより、平安時代に入ってから（八世紀最末もしくは九世紀初め）の造像であることを示唆するようである。

幸い現所蔵者のご厚意により、X線透過撮影を実施することができ、表面観察からは窺うことのできない構造の詳細を知り得た。

ここでX線透過画像（図4）に目を転じてみると、像は中空となり、像の輪郭に沿って数層に及ぶ布貼りが確認でき、表面に木屎漆を盛り付けて塑形した脱活乾漆造特有の構造を見て取ることができる。像内には像を支える構造材の存在は確認できない。本像の大きさに比べると構造材がなくとも自立に耐え得るようである<sup>(4)</sup>、当初からなかったものと思われる<sup>(5)</sup>。像表面に白濁するところが認められるが、それらは表面観察で窺われた補修のうち、甚大な箇所を示している。また、像内における後頭部、胸部、臀部下付近に短冊状の布の切り貼りが認められる。これらは補強のために破損が像内にまで及んだとみられる後頭部や右大腿側面から像内に貼

り込まれたようである。垂下した右腕の上膊半ばに筒状のものが差し込まれている様子が写り込んでいるが、折れてしまった上膊を修理する際に補強のため挿入された添え木の類であることは言うまでもない。このほか、両脚の裾裾から地付部に及んで横木材を当てるとともに、両足先を矧ぎ付けており、両足裏には木製の履い柄が差し込まれている。もとよりいずれも後補である<sup>(6)</sup>。

ところで、その構造に関して注目したいのは、上半身側面のX線透過画像(挿図9)に写り込んだ両耳のほぼ半ばを垂直に通る線にある。この垂線に対応するものが像表面における螺髻の側面中央ややうしろ寄り縦に走る亀裂であろう(図3-c、挿図4)。そして、頭部側面のX線透過画像に看取された両耳のほぼ半ばを通る垂線に続いて行くと考えられるのが、下肢側面のX線透過画像(挿図10)において認められる、脛部の側面中央ややうしろ寄りで縦にあらわれた線である。この垂線は一体何を意味するのであろうか。

天平時代の脱活乾漆造では、像は塑土を用いて概形をつくり、表面に麻布を数層に及んで貼り固めたのちに、像内の塑土を除去して中空にする。そのための塑土除去の手法は、後頭部と背面に刀を入れて縦長(長方形)の開口部(窓)をつくって、これを除去し、開口部に切り取った布貼りを再び当てて縫合するのが一般的である。ただし、本像の場合、後頭部は補修により開口部が存在したかどうか判然としないが、背部には縦長の開口部を設けた痕跡が確認できない。代わって、両耳半ばを通り、脛部の側面中央ややうしろ寄りで垂直にあらわれる線が認められるのである。

このことと相まって見過ごせないのは、上半身正面のX線透過画像(挿図8)において、両頬から頸部に至る布貼り層の厚みそのままに、布貼りの層が途切れることなく両肩口から体側へと続いている点にある。しかも、肩口と接する両腕の当該面にも同じ厚みの布貼り層を見て取ることができる。その肩口においては体幹部と腕の接するところに、双方を貫通する履い柄(木製の角柄)の影が左右ともに各一写り込んでいる。これらのことを総合するならば、本像は両腕と頭体の幹部を別々に塑土で概形をつくり、それぞれの表面に数層にわたって布を貼り固めたのち、頭体の幹部は両耳半ばを通る線で地付きに及んで刀を入れて前後に切開し、像内の塑土を除去したのちに縫合し、別につくった両腕を肩口において木製の履い柄で体幹

部と接合して、その後、像表面に木屎漆を盛り付けて塑形を行ったと解されるのである(図4)。なお、両肩以下の腕の内部の塑土の除去については、どのようになされたか現状では明確でないが、両腕に切開の痕跡が認められないことを思えば、別につくった腕釧を含む両手首の差し込み口から腕の中の塑土を除去したようにも考える。

塑土でつくった概形への布貼りの段階で頭体の幹部と両腕を別々につくり、頭体の幹部については両耳半ばを通る線で前後に切開する手法は、像内の塑土の除去において、後頭部と体部背面に長方形の開口部を設けて行う方法より効率よく隅々に及んで像内の塑土を除去することが可能と思われる。しかし、現存する天平時代の脱活乾漆造の作例にあつて類例が確認されないことは留意すべきであろう。

ここで天平時代後期から平安時代初期(八世紀後半〜九世紀初め)に及ぶ木心乾漆造の作例に目を転じてみると、法隆寺伝法堂東の間安置の天尊・阿弥陀如来坐像(像高八七・七cm)やその左脇侍である勢至菩薩立像(像高一二六・五cm)、あるいは、神護寺薬師如来坐像(像高六八・四cm)が、頭体の幹部を両耳うしろを通る線で前後二材矧ぎとし、内削りを頭・体に及んで貫通させて施し、像表面に木屎漆を盛り付けて成形をしていることは見過ごせない<sup>(7)</sup>。特に、法隆寺伝法堂東の間安置の天尊・阿弥陀如来坐像ならびに左脇侍の勢至菩薩立像においては、わざわざ像内に構造材を入れており、このうち、阿弥陀如来坐像では、像内の構造材が十字に組まれて、そのうちの水平に渡した材の両端が肩口の柄となつて、両上膊を構成する体側部材の接合に及んでいる。それらの構造の詳細をX線透過画像を用いて解析された本間紀男氏は、法隆寺伝法堂東の間安置の両像について「表面はすべて脱活乾漆の技法であり、たんに「捻塑」の部分の一部を木に替えたにすぎず、その先の技法である、漆布を用いず直接木屎でモデリングすることについての発想は持っていない」と指摘して、「木心の使用はたんなる試み、あるいは便法程度であつたことは、天尊の木心は頭軀のみで、難しい膝前、側腰を手慣れた脱活乾漆造で行う仕様が端的に物語っている。当像(引用者註)左脇侍・勢至菩薩立像」の大きな内削りも所謂脱活乾漆造りの「脱活」「脱空」のイメージの木部での再現と、心棒組入れの必要性が合わさつてのもの」と評価されている<sup>(8)</sup>。これら天平時代後期から平安時代初めにかかる頃

挿図3 同 右側面

挿図2 同 背面

挿図1 菩薩立像 左斜側面

挿図5 同 頭部右斜側面

挿図4 同 頭部左側面



挿図7 同 両脛部



挿図6 同 大腿部



挿図10 同 下肢側面



挿図9 同 上半身側面



挿図8 菩薩立像X線透過画像 上半身正面

(八世紀後半から九世紀初頭)の木心乾漆造の作例に認められる構造・手法に、脱活乾漆造との技法の相互交流を認めるならば、これらの木心乾漆造の諸像に認められる頭体幹部を前後二材矧ぎにして、像内の内刳りを頭体に及んで施す点において、さらには、法隆寺伝法堂東の間安置の阿弥陀如来坐像に見る両肩口の柄で両上膊を構成する体側部材を接合する手法において、造像時期をほぼ同じくする(もしくは接する)であろう本像が、頭体の幹部において両耳を通る線で前後に切開し、像内塑土の除去を行い接合し、両腕を肩口の柄で接合する仕様と通じていることは、決して偶然のことでないように思うのである。このように考えるならば、本像における脱活乾漆造の構造・手法が、他に類例を求め難いという理由で孤立させてしまうことは適切でない。

天平時代の脱活乾漆造の現存作例は数の上からも限られている。そのなかにあつて本像は、表面に補修が多いのも事実であるが、当初の像容をよく留め、天平時代の脱活乾漆造の終末期における作風を示すとともに、天平時代の脱活乾漆造がその終末期において到達したひとつの構造・技法を今に伝える作例として、これを位置づけることが可能なように考えるのである。

なお、現在、本像に付随する台座のうち、蓮肉部とその下の茸軸(双方を合わせ

挿図 11 菩薩立像台座 蓮肉部 上面

挿図 12 同 蓮肉部と茸軸 側面

ての高九・一cm)も像本体と一具当初とみてよさそうである(挿図11、12)。X線透過画像(挿図13)を参考にすれば、塑土で蓮肉部から茸軸に至る概形をつくり、表面に麻布を数層貼り重ねて固めたのち、茸軸底面の開口部から塑土を除去し、表面に厚く木屎漆を充填して成形したことが確認できる。現状、蓮弁のすべてを失うものの、蓮肉は周縁を面取りして薬頭を巡らせ、側面に薬を細かくあらわしており、別製の蓮弁を挿し込んだ茸軸は、蓮肉部の茸軸と接するところで一段分を、茸軸の蓮肉部と接するところで一段分を、さらに茸軸の半ばで一段分を、それぞれ八方向に設けて穿っていたことが確認できる。

脱活乾漆造の尊像に付随する台座の蓮肉部は、既知の作例では木造が主流であり、その表面に木屎漆を盛り付けて成形している。座とする像の荷重を思えば傾かれる仕様と言えよう。これに対して、本像は小像の類に属するものであり、像自体さほどの重量でないことから、台座の蓮肉部を茸軸にまで含んで脱活乾漆造でつくり得たように思われる。しかしながら、構造上、脆弱であることは否めない。事実、左足の柄穴外側で亀裂・陥没が生じている。このほか、側面の薬には欠失箇所や補修箇所も多く、蓮弁を挿し込んだ茸軸もすべて痕跡を留めつつ貫通孔を塞いでしまっている。伝世の過程で損傷を受け、修理がほぼ全面に及んでいるが、台座の蓮肉部

挿図 13 同 X線透過画像

と葦軸は、像本体と一具同時期であり、当初の台座を一部なりとも伝える点で貴重であることは言うまでもない。

註

(1) その来歴についての手がかりは今のところ得られていない。本像の存在については西川杏太郎先生からご教示いただくとともに、調査をお勧め下さり、現所蔵者に紹介していただいた。調査は二〇〇七年六月二日に実現し、現所蔵者邸において調査・撮影を行い、その際、國本学史・森美穂の両氏に協力を得た。また、構造の詳細を確認するべくX線透過撮影をお願いしたところ、ご快諾をいただき、二〇〇八年一月二十九日に研究所において、筆者が立会い、三浦定俊氏の監修のもと、松島朝秀氏によって行なわれた。なお、「お茶の水の古美術商」については水戸忠・中島高彦氏よりご教示を得ることができた。

(2) その他の法量(単位はcm)は以下の通り。

〔像本体〕

髪際高 六八・三、耳朶張 九・五、腹奥 一〇・七、  
 頂一顎 一七・二、面奥 一二・二、肘張 一二・〇、  
 面長 八・三、腋下幅 一三・一、裾張 一五・七、  
 面幅 八・七、胸奥(右) 一一・〇、足先開(外) 一〇・〇、  
 耳張 一二・三、〃(左) 一〇・三、〃(内) 三・四、  
 〔台座〕

総高 三五・九、葦軸上端径 一五・〇、

蓮肉部径 二一・六、〃 下端径 一三・三、

蓮肉部(表面)布貼り層下端)厚 二・七、

(3) 本像のX線透過撮影に関するデータは以下の通り。

X線管球 MCN165 (最大管電圧160 kV フィリップス)

感光体 イメージングプレート (STタイプ 富士フィルム)

	管電圧	管電流	照射時間	照射距離
像本体正面	50 kV	5 mA	1 min	150 cm
同 側面	50 kV	10 mA	1 min	300 cm
台座	70 kV	10 mA	2 min	300 cm

(4) 筆者が精査した事例で、像内に構造材が確認できなかった天平時代の脱活乾漆造の作例に神奈川・龍華寺菩薩半跏像(像高九〇・三cm)をあげることができる。

津田徹英「横浜・龍華寺藏 脱活乾漆造菩薩半跏像をめぐる知見」『龍華寺菩薩半跏像 美術研究作品資料第四冊』中央公論美術出版社、二〇〇七年。

(5) 後述の通り、本像は両脚の裾まわり以下を後補とする。このことも像内に構造材が存在しなかったことを示唆する。立像の脱活乾漆造で像内に構造材が存在する場合、構造材は像内で二本が並び立つこととなり、それらはそのまま両足柄となるようである。したがって、像本体にかかる負荷は構造材に吸収されることにより、脚部の裾裾のまわりに集中することが緩和されるであろう。本像の場合、像内に構造材を設けていなかったため、像の荷重・負荷は脚部の裾裾のまわりから両足、及び、両足裏に差し込まれた雇い足柄に集中することとなり、裾裾の付近で損傷が進んだように考える。

(6) 本像と一具同時期の作と判断される台座蓮肉部(後述)の上面には、像本体を立てるべく両足柄を挿し込む柄穴が穿たれており、左右ともに現状の両足柄(檜材後補)よりひとまわり大きい(後掲の法量(単位はcm)参照)。この柄穴は当初の仕口を伝えるようであり、造像時本像は両足裏につくりだした足柄(雇い柄か)をもつて蓮肉上に立てたように考える。

右足柄(現状) 幅 一・四、蓮肉上面の右足柄穴 幅 一・八、  
 〃 前後四・八、  
 〃 出 二・四、  
 前後五・三、  
 左足柄(現状) 幅 一・三、蓮肉上面の左足柄穴 幅 一・七、  
 〃 前後四・七、  
 〃 出 二・四、  
 前後五・二、

(7) このほか、この時期の作例で内刳りを施さないものの、頭体幹部の基本構造が両耳後ろを通る線で前後二材矧ぎになる木心乾漆造の例に額安寺虚空蔵菩薩半跏像がある。これらの像内構造については次の研究に教示されるところが少なくない。

本間紀男『X線による木心乾漆像の研究』美術出版社、一九八七年。

(8) 本間紀男『天平彫刻の技法―古典塑像と乾漆像について―』雄山閣、一九九八年。

(9) 註7の本間紀男『天平彫刻の技法―古典塑像と乾漆像について―』二二九頁。

ちなみに、葦軸下部の開口部には木製(針葉樹材)の扁平な数茄子風の円盤をはめ込み、さらに、平面を円形とする一木彫出(内刳りは施さない)の台座(受座・薬・反花・框(隅足付き)で構成)を取り付けている(蓮肉部を含む台座の総高は三五・九cm)。いずれも近世以降の補作である。

付記

註1で述べるように、本像の存在については西川杏太郎先生よりご教示いただき、あわせて、調査のお勧めと現所蔵者への紹介の労をおとりいただいた。また、所蔵者におかれましては、本像調査の機会を与えていただくとともに、研究所に持ち込んでのX線透過撮影についてもご快諾いただき、あわせ、尊像の資料紹介についてお許しを得た。ここに西川杏太郎先生ならびに現所蔵者の並々ならぬご厚情に対し、心より深く御礼を申し上げます。

追記

本稿で使用したX線透過画像を除く、菩薩立像の口絵、及び、本文中の挿図はいずれも津田の撮影になる。X線透過画像は三浦定俊氏の監修のもと松島朝秀氏がイメージングプレートを用いて撮影した画像である。このうち、像本体のX線透過撮影は正面・側面ともに三分割して行い、口絵に使用した全身正面ならびに側面のX線透過画像は、いずれも國本学史氏の手を煩わせ、上記の三分割画像を繋いだものである。

(つだてつえい・企画情報部文化財アーカイブズ研究室長)

図版要項

- 一 菩薩立像 全身 右斜側面 (原色刷) 東京個人蔵
- 二 (a) 同 全身 左側面 (原色刷)
- (b) 同 同 正面 (原色刷)
- 三 (a) 同 頭部 左斜側面 (原色刷)
- (b) 同 同 正面 (原色刷)
- (c) 同 同 右側面 (原色刷)
- 四 (a) 同 全身 正面 X線透過画像
- (b) 同 同 右側面 同
- 脱活乾漆造 像高七七・一cm
- 一―四 津田徹英「脱活乾漆造 菩薩立像」参照
- 五 (a) 萬鉄五郎 風船を持つ女 一九一三年(大正三) (原色刷)
- 油彩 キャンバス 縦七二・四cm 横五二・九cm 岩手県立美術館蔵
- (b) 同 表紙用原画(女の顔) 一九一三年(大正三)頃 (原色刷)
- 水彩 紙 縦二四・五cm 横一七・二cm 同 蔵
- (c) 同 スケッチブック(24)より(三二頁) 一九一三年(大正三)頃 (原色刷)
- 水彩 紙 縦一四・五cm 横一九・二cm 同 蔵
- 五 田中淳「試論・「新しい女」と「風船を持つ女」——萬鉄五郎《風船を持つ女》の制作背景と表現」参照